

## 鉄門海の思想

—『亀鏡志』の分析を中心に—

中村 宏  
鹿野 朱里<sup>①</sup>

### はじめに

即身仏について一般的には、以下のように知られている。すなわち、即身仏とは自ら土中に入って仏となった行者のことであり、即身仏になるには、山に籠り、一千日から五千日かけて五穀を断ち、木食行を行う。そのうち死期が迫ると土中の石室に入り、念仏をとえながら死に至る。三年三か月たつてから掘り返され、即身仏としてまつられると。

実際には生前の彼らの活動やそれを導いた思想、そして「即身仏」となった事情はどのようなものであったのか。本稿では、比較的資料が多く残されている鉄門海にかかわる『亀鏡志』の分析を中心としながら彼の思想に迫りたい。さらに即身仏を仏教者の自死の範疇として捉えるとき、同じような例が平安時代の往生伝などにも見られる。そこで両者の比較も行いつつ鉄門海の思想をより明確にしたい。

「即身仏」となった事情に関する先行研究には問題があると考え

る。早くに戸川安章氏が述べているものとして、「わが国には二十体以上のミイラが存在し、その中の十体以上が、湯殿山と弘法大師とミロクという仏に対する信仰にみちびかれて、みずから希望してミイラとなったところの、行人と呼ばれる修行僧や山伏・修験者のものである。(中略)じぶんがさとるだけではなく、生きることの苦しみにあえぎ、もだえ、なやんでいる衆生に、生きることの喜びを与え、はげまし、あますところなくこれを救済することの手伝いをしたい、そういう誓いをたててミイラになったのが、この人たちのなのである。」という説がある<sup>②</sup>。このように自ら衆生救済を希望してミイラとなったとしているが、本当にそうなのであるか。

松本昭氏は「大日坊の真如海上人のように天明の飢饉からの庶民救済の即身仏、あるいは全海上人のように水路の難所を開通した即身仏など、いずれも庶民救済の大願をかかげて即身仏になったと言える」と述べているが、本当に庶民救済を願って即身仏になったと言えるのであろうか。

近年の即身仏に関する代表的な研究としては内藤正敏氏のものがある。氏は、山伏が代官に提出した書状を取り上げて「湯殿山の山籠修行と木食行、断食行が、はっきりと民衆救済の祈願の意味を持つていた」と述べているが、これは必ずしも即身仏について言及したものではない。また氏は即身仏たちの山籠開始の年や入定の年が、重税や飢饉や疫病の時であったことを指摘し、「仙人沢山籠や土中入定などには衆生救済の思想が強くあった」と述べているが、これはあくまでも状況証拠に過ぎないと考える。また、「木食行で食べる木の実や野草が飢饉食だった」ことを指摘するが、そのことが「飢饉の時に人々を救うため」であったと言い切れるものである<sup>④</sup>か。

以上から考えるに、江戸時代の即身仏の木食行・断食行は、重税や飢饉や疫病からの民衆救済・衆生救済のためという内藤氏の説は

成り立つものか疑問である。氏はつぎのようにも述べている。

平安時代の「往生伝」には、死ぬことにとり憑かれたように焼身往生者の姿がみられたが、江戸時代の「往生伝」では焼身往生はなくなり、火葬後の舍利出現譚という消極的なものに変わった。いずれも土中入定伝説のように、宗教家が衆生救済を祈って死んでいった、という他者救済の思想がみられないのだ。これは、「往生伝」が、阿弥陀如来の極楽往生という、自己の救済を目的とする往生思想によってまとめられていることによる（中略）焼身往生や入水往生には稀薄な他者救済の思想が、土中入定に強くみられる<sup>5)</sup>。

江戸時代の「往生伝」については氏が述べている通りであるが、例えば、「信士良運ハ（中略）元文二年夏ノ頃ヨリ、瘡疾ヲ煩ヒ薬術効無レバ、老病ノ起ベカラザル事ヲ覚悟シ念仏益勇進ス」、<sup>6)</sup>「法尼妙教は（中略）宝暦五年初秋より微疾を感じ終焉近付ぬと、猶更策勵して称名の声とともに安祥として長逝す<sup>7)</sup>」というように、病気がきっかけとなっているものが非常に多い。内藤氏は、平安時代や江戸時代の往生を自己救済のため、江戸時代の即身仏（土中入定）を他者救済のためとし、とりわけ平安時代の「往生伝」に見られる自死と江戸時代の即身仏とを対比している。江戸時代の即身仏の思想の特徴を明確にするためには、平安時代の焼身往生・入水往生の思想と比較してみる必要がある。そのような点も踏まえて、確かな資料をもとに「即身仏」鉄門海の思想に迫っていききたい。

ところで現在、日本には十数体の即身仏が見つかっており、多くが山形県庄内地方に集中している。これらは湯殿山系即身仏と呼ばれている。これらの即身仏について、その活動や入定の動機などに関する資料は一部を除いてほとんど残されていない。しかし鉄門海については多くの資料が残っている。本稿で鉄門海を取り上げる所以である。資料が残っている理由については次章で検討する。な

お、鉄門海の活動がどのようにに継承されていたのか、その一端を明らかにするために、補論として盛岡藩領・岩手県域の場合について検討する。

## 一 鉄門海の生涯・活動と思想

### (一) 鉄門海の生涯と活動

先述したように鉄門海については、ほかの即身仏とは異なり、多くの資料が残されている。これらをもとに作成された年譜が『神と呼ばれた木食行者 鉄門海』（湯殿山注連寺発行、二〇一九年、二四～二七頁）に掲載されており、現在のところもつとも信頼できるものである。まずはこれに基づき、鉄門海の生涯と活動についてまとめる。

鉄門海は、宝暦九年（一七五九）に鶴岡大宝寺村（現鶴岡市宝町）に生まれた。川人足で冬は木流しを生業としていたという。安永八年（一七七九）、二十一歳の折りに湯殿山注連寺に入門し、天明八年（一七八八）五月頃、三十歳の折りに湯殿山仙人沢で千日間の山籠修行を開始した。寛政三年（一七九一）には本明寺の住職に就任し、そののち布教活動や社会貢献の活動を展開した。文化四年（一八〇七）の頃より、二度目の千日山籠修行を開始したと推察されている。文化七年（一八一〇）、加茂坂新道（現鶴岡市）の普請を始めた。江戸時代の加茂湊は活気のある商業港であり、その加茂湊と鶴岡城下を最短で結ぶためには加茂山を越える必要があった。加茂坂新道普請により、加茂湊はより発展したという。文化十一年（一八一四）には海向寺の住職に就任した。文化十四年（一八一七）六月、京都の御室仁和寺より「恵眼院」の院号と上人号を授与された。それ以降、鉄門海から恵眼院鉄門上人と名乗り、石碑の文字も

「鉄門海」から「鉄門上人」に変わる。そののち海向寺、注連寺などの再建を行い、文政十年（一八二七）には松前において布教活動も行ったが、文政十二年（一八二九）十二月八日、七十一歳で入滅した。

## （二）鉄門海の活動を導いた思想

鉄門海についてはさまざまな言い伝えがあるが、ここでは「鉄門海」および「鉄門上人」（文化十四年以降）の名が記された資料に基づいて、彼の活動を導いた思想について検討する。先に挙げた『神と呼ばれた木食行者 鉄門海』にはそれらの資料の写真が掲載されており、以下で取り上げて解読し検討する。

まずは「即身仏」本明海が抱いていた塔婆の写真に注目する。<sup>11</sup>ここからは以下の文字を読み取ることができる。

本明海宗和上人 誕生 剃髮 遷化年数  
 元和九癸亥年誕生 寛政九丁巳年迄百七十五年  
 寛文二壬寅年剃髮 寛政九丁巳年迄百三十五年  
 天和三癸亥年遷化 寛政九丁巳年迄百十五年  
 本明海堂 寛政六甲寅年六月 鉄門海再建  
 本明海即仏衣替礼盤 寛政九丁巳年四月

### 鉄門海謹奉納

これは寛政九年（一七九七）に、鉄門海が本明寺の「即身仏」本明海の衣替えを行った折りに奉納したものである。誕生から百七十五年とあるが、正確には百七十四年、遷化から百十五年とあるが、正確には百十四年である。

この塔婆から鉄門海は、本明海を「即仏」として崇拜していたため、その衣替えに携わっていたことが分かる。なお、「衣替」えの意味することについては、『亀鏡志』の分析のところで検討する。

仙人沢での修行を終えた鉄門海は、寛政三年（一七九一）、本明

寺の住職になり、本明海が祀られていた即身仏堂を再建し、寛政九年に衣替えをして塔婆を抱かせた。本明寺住職を二十年務めた後、海向寺（現酒田市）の住職となり、即身堂を再建した。これらのことから鉄門海は、即身仏への信仰を支え広める役割を果たしていたと考える。

つぎに、伊藤太郎左衛門家（鶴岡市上名川）に伝わる掛け軸の写真に注目する。<sup>12</sup>そこには書とともに鉄の絵が描かれている。その書を翻刻したものをここに初めて紹介する。

抑神代の昔より今に伝へて聊も変らず、広く八国を治め、少ハ家をと、のふ道具にして、雪中の筍も、こかねの釜もみな是をもて掘出せり、されハ米も豆も綿も金も、都て是より出さるハなし

畑に田に水うち出の鍬や小槌より

此書画何人の作なるを志らす 鉄門海

ここには「此書画何人の作なるを志らす」とあるが、「鉄門海」の名前が記されていることから、彼にとつて重要な掛け軸であったことが分かる。鉄門海自身は百姓出身ではないが、百姓の立場に立った活動をしていたことが分かる。さらに、「広く八国を治め、少ハ家をと、のふ道具にして」とあることから、彼は百姓の立場にありながら、「治国齊家」（『大学』）も念頭に置いていたと考える。さらに、今野誠一家（山形市）所蔵の掛け軸の写真も掲載されており、<sup>13</sup>ここには、つぎの文字が記されている。

湯殿山 （右手形）

水 アーシク（胎蔵界大日如来） 木食

（左手形）

惠眼院

鉄門上人（花印）

「惠眼院／鉄門上人」とあるところから、文化十四年（一八一七）

以降のものであることが分かる。この「水」の文字は、のちに取り上げる遺言から考えるに、火災から免れるための火伏のお守りとしての意味があったと言える。

この点に関連して石碑の写真のうち鶴岡市大東町にある出羽三山碑に注目する。刻まれている文字を解読したものをつぎに掲げる。

月山

アーンク（胎藏界大日如来） 湯殿山 水神権現 鐵門上人

羽黒山

文政十二年丑六月十五日

文政十二年（一八二九）六月は、鉄門海が亡くなるほぼ半年前であり、「水神権現」とあることから、これも火災除けにかかわるものである。鉄門海は、庶民を火災から救済したいという思いがあり、それが、後述する鉄童海にも受け継がれたと考えられる。

つぎに、工藤定雄編『酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇』（一九七七年）に収められている町野甚十郎家（山形県東田川郡三川町成田新田）所蔵の「海向寺史料」を取り上げる。そこには鉄門海に関する資料がいくつか収録されている。

まずは「鉄門」の名で、庄内藩の寺社奉行下役の榊原伊三郎・寒河江壽右衛門・青柳周治に宛てた、文政十年十二月付けの「以三口上書「奉願候」という文書である。

（前略）松前迄罷下候処、殊之外信心之族大勢有之。是迄松前より湯殿山参詣等も無御座候。此度講中と申もの三組相結び、明年夏中より年々罷越候積二御座候。（中略）右之外南部二三組、江戸表二一組、越後二壹組御座候。是又拙僧を寄依仕相始候講中二付（後略）

鉄門海が松前まで赴き、湯殿山講を三組結成したこと、そのほか南部に三組、江戸に一組、越後に一組結成したことが確認できる。鉄門海は、湯殿山信仰の広まりにも大きくかかわっていた。

つぎは、やはり「鉄門」の名で同じ榊原伊三郎・寒河江壽右衛門・青柳周治に宛てた文政十年十二月付けの「乍恐御内意奉願上候」という文書である。

注連寺末寺南岳寺・海向寺儀、無禄困窮之寺に御座候間、修覆并相続方等難決仕候二付、相成候ハ、連々地盤相立候様仕度、兼々心掛罷在候之処、此節少々之貯も出来仕候二付、南岳寺え金貳拾両、海向寺え貳拾両、永代修覆料二寄附仕度奉存候。（後略）

ここからは鉄門海が、困窮していた南岳寺と海向寺のために寄付をしていたことが確認できる。

最後に鉄門海の死にかかわる資料を取り上げる。つぎは「鉄門」の名で注連寺役僧中に宛てた文政十二年十一月付けの「乍憚以三書付「奉願候」という文書の一部である。

拙僧及二老年一此節大病二付全快之程も難斗奉存候。

鉄門海はこのとき大病を患っていたようである。さらに「海向寺史料」にはつぎの記録がある。

（前略）文政十二年（中略）同年十月十八日之夜五ツ半頃より御上人様風与御病症の床に伏し給ふに、信心之諸万人こゝろを勞し色々仏様の加護を念じ、薬用御進め申せしかども更に其験も薄く定業限りにや、終に医業の力及はず、十二月八日の暁に行衣を着し珠数をつまぐり、御称名三遍終るか否眠がごとく往生ましましけるこそ有がたき御有様也。（中略）同十三日二二重棺にして新山権現堂之後のかたに葬りけると也。

この話は「はじめに」で紹介した江戸時代の「往生伝」に近いものがある。ここには鉄門海は病死し、そのち埋葬されたことが記されている。

ところで、『酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇』に収録されている庄内藩士の池田玄斎（安永四・一七七五年～嘉永五・一八五



二年)が書いた『弘采録』四十五巻には、「鐵門海の事」という文章で、実際に鐵門海に会った玄斎の証言がある(二三六頁)。

(前略) 山を出て岩本に住せり。其ころ玄斎も病ありてかれが加持を乞ふべきと母人の勧め給ふまにまに岩本に至りてかの行者に逢ひたり。誠の一丁字も知らねども容貌凡ならず、徒弟を導くに法あり、戒行に至らざる処なし。其後予が歌を学びし杉山廉姫の許に來り、懇に短尺を書賜ふべき旨を乞ふ。其數夥しき事にて三千余枚なりしかバ、予怪ミ人をして問ひけるに、鐵門答て拙僧生得て文盲なることは前世の業因のしからしむる処なるべけれバ、今の世に杉山姫のごとき歌人は稀なれば、この人の歌を乞ひ得て湯殿山へ參詣の人々に施し侍る也。左あらんには來生は文筆に通達すべき身ともならばやと思ふのミ。是等ははかなき事の様なれど、其志処に殊勝なる事感ずべし。且無慾にて廉女の貧しくおハしけるを見て、衣類などを贈りて謝せるのミならず、折々菓物を持來りて起居を訪ふ事なりき。四十歳斗にて東都に登らんとて(中略)。ことし天保三年の夏、かれが坐化せる骸を掘り出して西樂寺にて開帳せるは鐵門が本意にはあらじといへり。幟などにも鐵門上人即身仏と書たるなどいふ、をこがましくぞおほほゆ。

先の年譜によれば、鐵門海が湯殿山から下りて岩本の本明寺の住職となつたのは、寛政三年(一七九一)であつた。右の証言に見える「四十歳」云々は寛政十年(二七九八)に当たる。よつて両者は、寛政三年から十年の間に会つていたことになる。この話によると、鐵門海は一字も書けずに文盲であつたという。そして彼はそれを氣にかけていた。鐵門海は文盲へのコンプレックスを抱いていたため、文字に巧みな人への憧れが強く、そのため代筆者を近くに置くことになり、結果、彼に関する資料が多く残されたものと考え

また、無欲であり、貧しい女性に親切にしたとの話から、貧しい人々の立場に立つた活動をしていたことが分かる。この話が女性であるのは偶然かもしれないが、のちに見る『龜鏡志』でも湯殿山に參詣に來られない女性について記していたことを考えると、女人救済の思いも強かつたと考える。

そしてこの証言によれば、鐵門海の遺骸は天保三年(一八三二)に掘り出されて、即身仏として崇められたという。しかし池田玄斎らは、掘り出されて即身仏になるのは、鐵門の本心ではなかつたと考えていたようである。

渡部留治編著『朝日村誌(一)湯殿山』(一九六四年)のなかで渡部氏は「出羽三山に残された六体の高僧のミイラは、この様に生きながら仏に化す。悲願を達して、静かに彼岸の浄土に旅立つた」(二四六頁)と書いているが、少なくとも鐵門海については間違つており、彼は自ら即身仏になつたわけではない。

鐵門海の死に関し、つぎに彼の遺言を紹介し検討する。『酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇』(六九九頁)に、彼の遺言書が収められている。ただし、多少の間違いも見られるので(大きなところでは第三条「留方」を「暮方」、海向寺にある、町野甚十郎家(山形県東田川郡三川町成田新田)所蔵の「文政十二乙丑十月廿五日鐵門上人御遺言書」の写しに基づき、正確な翻刻全文を左に掲げる。なお、これは清海の代筆によるものである。(傍線は鹿野、以下同じ)。

- 一、寺中火之元用心、盜難之類要用之事
- 一、第一弟子中和合相勤具候事
- 一、海向寺留方大勢可レ為ニ無用一事
- 一、六角堂普請之義ニ付弟子中心を揃、明年明後年迄成就いたし候様頼置候事
- 一、狩川山崎勢至堂、海向寺末寺ニ致様酒井吉之允様御祈願所

奉納被<sub>レ</sub>成下<sub>一</sub>候様、御家来相馬外右衛門様御内義おぬい  
さま頼申事

一、恵海行者・蓮海行者随心可<sub>レ</sub>致事。乍<sub>レ</sub>去後住<sub>ニ</sub>致候義無<sub>レ</sub>  
之候事

一、越後忠海・法海御行衆え跡々宜頼事

一、注連寺様え弟子中万事御添心被<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>目、出情<sub>(マツ)</sub>致候様呉々  
頼置候事

一、鉄蔵え直々申置候。海向寺は勿論岩本山崎寺等え立寄候  
事無用也。右之通承知可<sub>レ</sub>致事

一、金拾両、蓮海行者より借用有<sub>レ</sub>之候処、六角堂え寄附<sub>ニ</sub>致  
呉候事

一、松前より之唐物脇方え引当<sub>ニ</sub>致置品手<sub>ニ</sub>入候ハ、注連  
寺・海向寺・山崎勢至堂・本明寺・鶴ヶ岡南岳寺、右五ヶ  
所<sub>ニ</sub>寺社御下役榊原伊三郎様え相談之上、寺社御奉行付え  
御沙汰を遂、宝物<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>致置<sub>一</sub>事

一、大宝寺太郎兵衛宅え有諸道具之内、膳椀之類迄分取られ候  
而は迷惑成事<sub>ニ</sub>候。尤入目之品は夫々見分候而取計可<sub>レ</sub>申  
事

一、山崎は海向寺末寺<sub>ニ</sub>致置候得は、万事聞合可<sub>レ</sub>申事。猶又  
勢至堂え籠衆之義は一七日・二七日<sub>ニ</sub>限り其上永籠無用可<sub>レ</sub>  
為<sub>レ</sub>事

右者山崎代々住寺替<sub>リ</sub>ニ急度申合可<sub>レ</sub>置事

右之通、行者之面々、愚僧亡跡<sub>ニ</sub>而も心得違無<sub>レ</sub>之様和合いた  
し急度相守可<sub>レ</sub>申候。依而遺書如<sub>レ</sub>件

文政十二乙丑年

十月廿五日

鐵門上人(印)

鶴ヶ岡南岳寺

越後岩船

拂田

山崎西光寺

帰本海 忠海 心海 蓮海

海向寺 伊達二本松 南部森岡 越後瀧谷圓海寺

清海(印)祐海 門海 海法海

米沢 岩本本明寺 西沿 米沢

徳門海 金海 門龍海 法新海

米沢 海向寺門 仙台

光明海 鉄運海 清運海 圓明海

水沢庵主 福正坊 照海 学龍海 恵海

自分の死後の実務的なことについて、弟子たちに伝えていたが、  
即身仏にかかわることは見ることができない。ここでは寺の火災や  
防犯に気を付けるように注意をし、弟子たちが自分の死後も仲良く  
結束するように言い伝えているが、この記述はほかの資料にも見る  
ことができる。『朝日村誌(一)湯殿山』(二三三頁)には、本道  
寺・大日寺・注連寺・大日坊の、仙人沢・玄海行人に宛てた文政六  
年(一八二三)四月付けの「掟」が掲載されており、その一部を引  
用する。

一、行人仲ヶ間、睦敷可<sub>レ</sub>致事

同じ『朝日村誌(一)湯殿山』(二三三頁)にある「総門掟」に  
も次の文言が見え、鉄門海のものと同なる。

一、喧嘩口論堅可<sub>ニ</sub>相慎<sub>一</sub>事

一、(前略)火之元は勿論、門戸之取締等念入、(後略)

火事や窃盜、仲間内での諍いなどは、鉄門海の遺書にも取り上げ  
られており、これらは彼が常日ごろ気にかけていたことなのであろう。  
のちに検討するが、鉄門海の場合、平安時代の往生者の自死と比  
べても、我が身の諸仏などへの供養という面や、世を厭うというよ  
うな面は見られない。それよりも、彼の生前の活動を見るかぎり、  
窮民や百姓、女性などの救済への思いが強かったと考える。

## 二 『亀鏡志』の思想

## (一) 引用典籍についての検討

以上のいくつかの資料のほかに、鉄門海の思想をより深く探るための重要な手がかりとなるのが、もとは注連寺の縁起書であった『亀鏡志』である。ところが従来の研究でこの資料を本格的に分析したものは見当たらない。これは、昭和三十五年(一九六〇)に行われた出羽三山ミイラ学術調査のときに、鉄門海の座布団の下から発見されたものであり、『朝日村誌(一)湯殿山』に翻刻された。鉄門海にとって規範となる重要な本であったと考えられる。ところが、そののち行方不明になっていたが、平成二十八年(二〇一六)に、鶴岡市立図書館郷土資料館で見つかり現在も保存されている。なお、朝倉海玄編『湯殿山 別当注連梵寺 亀鏡志』(湯殿山注連寺発行、二〇一六年)にその影印が載せられ、再び翻刻されたが、どちらの翻刻にも間違いが見受けられる。

そもそも、『亀鏡志』とは、文化九年(一八一二)五月下旬に、鉄門海と庄内藩士の富樫久定が、元禄六年(一六九三)春に記された注連寺の縁起書を「改書」(書き直)したものである。富樫は代筆者と考えられる。鉄門海は自ら即身仏になったわけではないが、即身仏の思想を伝えた代弁者でもあったと言えよう。

以下、鶴岡市立図書館郷土資料館所蔵本に基づき、重要な箇所について正確な翻刻を掲げた上で検討する。(傍線は鹿野、以下同じ)。御山へ参る事ハ多日の行にて参ル也。暇なき者ハ長き行ハ成難し。行をせざれハ参詣ハならん也。此故に五日七日之行にて此堂の本尊を拝し奉れハ、一念の願をとぐる結縁ニ新山に勧請有也。別而ハ女人の爲ニて候。其故ハ、上火之行ハ大切なれとも、示を請て女人も七五三を戴くなり。然レ共御山へ参る事ハ

不成。御山へ参らざれハ、法性之如来を拝し奉る事なし。爾ハ値遇之縁のなき事を啓て、此堂ニ参りぬれハ則法性之大日如来に値遇し奉るゆへに、女人を助ケんと思召ス大慈悲の御心にて此所ニ此処ニ勧請し給ふ也。

これは、注連寺の新権現堂について述べたものである。ここからは、「暇なき者」つまり忙しくて修行に時間がとれない庶民や、女人禁制である湯殿山に参拝できない女性についての配慮がうかがえる。ここからも先に見た、鉄門海の庶民や女性を救済したいという思想を見ることが出来る。ほかの資料には見られず、とりわけ重要なのは、断食塩断の意味について述べた以下の部分である。

或人云、此行之初に垢離をして身を浄メ、亦上火ニ付ゆへに平火を断て、上衣、冠り、七五三を着し、上火を食する。於レ理しかるべし。其上に又日を重ネ断食し或ハ塩を断、又日々百度千度垢離を重事いかんと云に謂、垢離を重ネ断食し塩断してはけむ事、信心勇猛故にて勤也。ケ様之事も仏の説ニて候。

蘇婆呼経云、金剛菩薩之曰、念誦之人起首して求ニ悉地一者ハ応レ具ニ八形一、或ハ二三日又須ニ断食一、然して後作ニ成就之法一。我所レ出之語ハ不為ニ三心浄一故教て令中断食上。但し衆生ハ以レ皮纏縛血肉髓脳肝膽腸胃心腎脾肺脂膩痰膜屎尿種々の穢物を常に流て不レ停。如是身ハ地水火風仮に合し成立。如三四ノ毒蛇を置ニ一ノ箱一。欲レ令ニ彼等之屎尿涕唾之臭穢不レ出、故為に遣ニ断食一。非下為レ妨道之遣レ断已上と。穢塵童子経曰、修行者欲スニ成就ニせん此法一、先断ニ五辛一、不レ食レ塩不レ食レ油、断レ語を於一之浄所、三時澡欲し三時換レ衣、結レ印誦ニ隨心之真言一万遍一、則行法成就ス。於ニ一切之事一必獲成就矣。瞿醯経云謂、換レ衣是外潔、断レ食是内きよし。若内外浄きよけれハ所レ得之果報微妙第一。

生を受たる身ハ、皮ひとへを以て筋骨肉、其間ニハ臟腑有て食物を包ミ置、其食熟して屎尿涕唾津痰口ニ出、耳目之汗津、身ニハ汗液間なく出ル也。ケ様成臭キ穢を洗淨メ仏前に可向。故に殊ニ仏の説キ給ふ也。断食塩断ハ不浄を出さましき為也。

「上火」とは一世行人によつてきり出された清浄な火のことである。ここでは断食塩断の意味について、『蘇婆呼經』と『穰塵利童子經』と『瞿曇經』という三つの經典からの引用に基づき述べている。断食塩断は、不浄を外に出さず、穢れを浄化し仏に向かうためであった。なお、先に見たように、鉄門海が本明海の衣替えを行ったのは、「外」を「潔く」するためであったことがここから分かる。しかし重要なのは、断食の目的はそれだけではないとしていることである。

又断食も偏ニ臭汚のなき為斗にもあらず。西域伝ニ南海之浜に有二山寺。觀世音菩薩常ニ止。其中ニ給ふ。随而念スル者あれハ、随而応ずる事如レ響。無レ不ニ感赴。若山寺に至て断食を七日すれハ、則見ニ聖者ニ親為に説法す。良々以てすれハ、断食ハ心猛成か故に使ニ感見通明一也。是猛キ心ヲ以て強勝に修すれハ、寢食を忘れ、然レハ則感応可レ爾なり。

ここには「西域伝」が引用されているが、原典を確認すると「使感見通明也」までが、その引用部分であることが分かる。引用部分に見られる「聖者」とは鉄門海にとっては何を意味しているのか。同じ「亀鏡志」中のほかの箇所から検討する。なお（ ）は二行割りを示す。

注連寺之新山権現ハ則湯殿大権現にて候。(中略)弘法大師此山を開き給ふ事ハ八大金剛童子出現して上火之行法を大師ニ授給ふ也。(八大金剛童子ハ則湯殿山大権現也)。大師ハ教への如く上火を行ひ給ふ也。其上火之壇場に湯殿山大権現を勧請し給ふ。則此堂にて候。(中略)湯殿山大権現ハ法性法身の大日如

來ニテまします故に、此堂則法性法身の大日如来にて候。

是より三里程にして対面石とて二ツあり。則権現の座、大師の座也。大師此処ニ至り給ふ時、(中略)権現石上ニ現したまふ(八大金剛童子也)。大師ニ向て上火の作法軌則を悉く説授ケ給ふ。

「上火之行法」とは「上火」をきり出す作法のことである。空海が、山中に出現した湯殿大権現(八大金剛童子)と対面し、上火の作法を説き授けられたこと、湯殿大権現は大日如来の垂迹であることが記されている。ここから類推するに、鉄門海にとつての「聖者」とは、大日如来を指していると考えられる。断食の目的は身体を浄化するためだけでなく、大日如来と「感応」するためであった。その根拠として挙げられたのが、「西域伝」であった。

なお、『亀鏡志』には、以下の記述も見られる。

大師此寺ニ留り給ふ印ニ古キ書に三十三尊廿一種と云事あり。(中略)理趣經、大黒天之板、六字之板(剣ノ名号)、此三種も二十一種の内成べきか(今に有)。亦三十三尊ハ権現堂之本尊大日如来(則今の本尊也。是破損して貞享之年京にて再興ス)。上品之弥陀如来(文和年中之火事に此仏即時に失せ給ふ。後堂再興之時出給ふ也。今にあり)、(中略)文禄元年之冬臘月十七日権現堂焼失ス(此時上品之弥陀失ス。大日如来の事沙汰なく知ぬ。破れて器ニ入て置ならん)。而后寛永廿年之頃、住持宗長法印、藤堂大学頭殿之助力を以て造興ス。地形之時件の炭灰の上ニ上品之弥陀出現す。遠近之貴賤感動ス(今現に在スなり)。扱大日如来ハ悉く損シ在ス。貞享之年於ニ京都一再補奉り、今権現堂ニ安置ス。

傍線を引いたところには、阿弥陀信仰を見ることができるといえる。海向寺(酒田市日吉町)所蔵の掛け軸「当山中興八世鉄門海上人筆六



字名号」にも以下の通り記されている。

南無阿弥陀仏

惠眼院鐵門上人七十一歳書(印)

鉄門海は阿弥陀信仰もとりわけ重視していた。

## (二) 平安時代の往生伝などとの比較

以上、江戸時代の即身仏に関して『亀鏡志』を取り上げて分析した。というのは『亀鏡志』にかかわる鉄門海自身が「即身仏」とされており、かつ、この書物は「即身仏」鉄門海の座布団の下から見つかったからである。ここには「上火」の作法や断食などの修行方法が記されており、「即身仏」になるための規範となる重要な手引き書でもあると考えられる。その即身仏は仏教者の自死の範疇に入るものである。そこでここからは往生伝に注目し、平安時代の往生伝などにとりわけ多く見られる自死の場合と比較してみたい。資料としては、日本思想大系七『往生伝 法華験記』(岩波書店)を使用する。ここに収録されている往生伝などに、どれくらいの自死の例があるか。分析した結果は以下のとおりである。

・慶滋保胤(？)長保四・一〇〇二年)『日本往生極楽記』永延元年(九八七)頃成立。

〇名/四五名

・『大日本国法華経験記』(『本朝法華験記』、卷上・中・下)長久年間(一〇四〇〜一〇四四)成立。

三名/一二九名

〔上第九 奈智山の応照法師〕熊野(焼身)

〔上第十五 薩摩国の持経の沙門某〕(焼身)

〔中第四十七 越後国の鉄取上人〕(焼身)

・大江匡房(長久二・一〇四一年〜天永二・一一一一年)『続本朝往生伝』康和三年(一一〇二)頃成立。

〇名/四二名

・大江匡房『本朝神仙伝』承德二年(一〇九八)頃成立。

〇名/三一名

・三善為康(永承四・一〇四九年〜保延五・一一三九年)『拾遺往生伝』(卷上・中・下)天永二年(一一一一)頃成立。

三名/九五名

〔中五 無名上人〕康平年間(一一〇五八〜一〇六四)(焼身)

〔中二三 藤井久任〕(焼身)

〔下一七 持経者長明〕永保年間(一一〇八一〜一〇八三)(焼身)

・三善為康『後拾遺往生伝』(卷上・中・下)保延三年(一一三七)〜保延五年(一一三九)の間成立。

三名/七三名

〔上四 薩摩国旅僧〕天永三年(一一一二)(入水)

〔上一四 伊予国僧円観〕康平五年(一一〇六二)(焼身)

〔下五 上人行範〕大治年間(一一二六〜一一三〇)(入水)

・蓮禅(藤原資基)『三外往生記』保延五年(一一三九)以後成立。

六名/五二名

〔二〇 土佐国金剛定寺上人〕(焼身)

〔二〇 一児童〕(焼身)

〔二三 僧永助〕(焼身)

〔二六 近江国聖〕(入水)

〔四一 近江国一父〕(焼身)

〔四五 越前国入道念覚〕(焼身)

・藤原宗友『本朝新修往生伝』仁平元年(一一五一)成立。

二名/四一名

〔三 丹後国一行人〕(焼身・入水)

〔一一 沙門行範〕大治年間(一一二六〜一一三〇)(入水)

・如寂『高野山往生伝』文治三年(一一八七)以後成立。

○名／三八名  
 ・行仙坊（？）弘安元・一二七八年）『念仏往生伝』（残簡、鎌倉時代のもの）

○名／一七名  
 延べ人数は十七名であるが、『後拾遺往生伝』の「下五 上人行範」と『本朝新修往生伝』の「一一 沙門行範」は重複している。

以下の延べ十七名についての記述のうち、自死の方法やその動機について記されているものを挙げて分析する。まずは『大日本国法華経験記』である。（傍線は鹿野、以下同じ）。

沙門応照は、熊野奈智山の住僧なり。（中略）法華を誦するをその業となし、仏道を勤求するをその志となして、山林樹下を棲となし、人間の交雑を樂はず。法華を転誦するの時、薬王品に至るごとに、骨髓に銘じ肝胆に徹して、喜見菩薩の身を焼き臂を燃きしことを恋慕随喜せり。遂に念願を發すらく、我業王菩薩のごとく、この身を焼きて諸の仏に供養せむとおもへり。穀を断ち塩を離れて、更に甘味を食せず。松葉を膳となし、また風水を服して、もて内外の不浄を浄め、焼身の方便となす。焼身の時に臨みて、新しき紙の法服を着て、手に香炉を執り、薪の上結跏趺坐して、まのあたりに西方に向ひ、諸仏を勧請して、發願して言はく、我この身心をもて法華経に供養し、頂をもて上方の諸仏に供養し、足をもて下方の世尊に奉獻す。背の方をば東方の薄伽梵納受したまへ。前の法をば西方の正遍知哀愍したまへ。乃至胸をもて釈迦大師に供養し、左右の脇をもて多宝世尊に供養し、咽喉をもて阿弥陀如来に奉す。乃至五臟は五智如来に供養し、六府をもて六道の衆生に施与す、云云といふ。即ち定印を結びて、口に妙法を誦し、心に三宝を信す。乃至身体は灰と成りしも、経を誦する音絶えず、散乱の気色を見ず。煙の香臭からず、沈檀の香を焼くに似たり。（中略）こ

れ則ち日本国最初の焼身なり。（後略）  
 場所は熊野。この応照法師が日本初の焼身だという。喜見菩薩とは、『法華経』薬王菩薩本品に見られる薬王菩薩の前世の姿であり、仏や『法華経』に供養するため臂を燃やした菩薩である。これによると、応照法師は断食して身体を浄化した上で焼身を遂げているが、それは、我が身を諸仏などに供養することが目的であったと言える。次も『大日本国法華経験記』からである。

薩摩国に一人の沙門あり、その名を知らず。出家してより已後、法華を誦誦し、三時に常に法華懺法を修せり。（中略）三年山に籠りて、千部の法華経を誦誦し已へて、この思惟を作さく、發し難き信を發して、千部の経を誦し、自他の罪を悔いて、三時に懺悔す。もし我山を出でて、人間に交雑せば、世習に染着して、還りて悪業を作り、邪見に牽かれて、円乗の善を廢せむ。我身命を愛せず、ただ極樂浄土に生れむことを念ふ。身を焼き三宝に供養するにしかずとおもへり。この念を生じ已へて、弥、信力を励まし、深く道心を發して、有待の身を焼くこと、喜見に異ならず。

身を焼くのに臨みて、誓願を立てて云はく、我千部の経に依りて、当に極樂世界に生るべし。焼身の跡において奇しきことあるべし、云云といへり。即ち身を焼くの間、風は吹かずといへども、煙は西に向かひて疾く行き趣きぬ。空は明かに晴るといへども、紫雲東に指して聳けり。（後略）

これは、応照法師の場合と同じく喜見菩薩の話と関係がある。また、「身を焼き三宝に供養するにしかずとおもへり」とも見える。ただし、「もし我山を出でて、人間に交雑せば、世習に染着して、還りて悪業を作り、邪見に牽かれて、円乗の善を廢せむ。我身命を愛せず、ただ極樂に生れむことを念ふ。身を焼き」とあるように、應照の場合よりは、世の中を厭い、命に執着せず、極樂浄土に生ま

れ変わりたいという思いが強い。つぎは『拾遺往生伝』からである。

持経者長明は、信濃国戸隠山の住僧なり。生年廿五にして、言語を断ちて三年、法花を誦して幾の日ぞ。毎日に百部なり。(中略) 邂逅に客に語りて曰く、吾はこれ喜見菩薩の後身なり。この処に來り生れて、身を焼くこと三遍なり。今生の終焉は、三月十五日を期せむ。然れども都率天の上は、来るに会はず限ありといへり。二月十八日、遂にもて身を焼きつ。時に永保年中なり。(後略)

この話の場合も、喜見菩薩と関係がある。以下では『後拾遺往生伝』から一例、『三外往生記』から二例を挙げる。

上人行範なる者、台山の住僧なり。大治年中、世間静かならず、常に無常を觀じ、自ら有為を厭ひ、便ち天王寺に詣り、七日食を断ち、一心に念仏し、淨衣を着し、衣の裏に沙を盛り、海中に往きて、將に身を投げんとす。(中略) 沈没して止む。(後略)

土左国金剛定寺に一上人有り。頃年の間、望みを西方に繋ぎ、今生の事、敢えて芥蒂せず。往生の念は、老いていよいよ切なり。残年の長きを厭ひ、遂に以て焼身を企つ。先づ薪を淨所に積み、身を其の中に納め、合掌して西に向かひ、高声に念仏す。(後略)

入道念覚、越前国坂北郡の詔隆寺に住む。廿余年、念仏を事と爲し、いよいよ余生を厭ひ、俄に其の身を焼く。先づ西方に向かひ、札拜すること千返。次に高声に合殺す。(中略) 又た念仏千遍、薪の後ろに就き、手に定印を結び、猶ほ以て念仏す。薪尽き煙晴れ、紫雲天に弥り他境に当たる。(後略)

以上の『後拾遺往生伝』と『三外往生記』の三例は、この世を厭

うという思いが自死に至った動機であるとされている。

以上より、平安時代の往生伝などに見られる自死の動機としては、我が身を諸仏などに供養すること(焼身往生)と、世を厭うということ(焼身往生・入水往生)の二つがあることが分かる。往生伝などのなかでも比較的初期の『大日本国法華経験記』(長久年間(一〇四〇―一〇四四)成立)と『拾遺往生伝』(天永二・一一一年成立)では、諸仏などへの供養の面があらわれており、それよりも比較的新しい『後拾遺往生伝』(保延三・一一三七―保延五・一一三九年の間成立)や『三外往生記』(保延五・一一三九年以降成立)では、世を厭うという面が見られる。ただし、いずれにせよ身体を残すという思想は見られない。

以上を踏まえ、『龜鑑志』に見られる大日如来との「感応」に関連して断食に注目したい。断食は江戸時代の即身仏の場合だけではなく、平安時代の往生伝などにとりわけ多く見られるからである。そこで断食に関する記述や表現に注目する。まずは、先の往生伝などに見られる断食のすべての記述と表現について取り上げる。

#### 『日本往生極楽記』

「永絶二喰飯二」(一四)、「断二飲食一、唯飲二茶耳」(一五)

#### 『大日本国法華経験記』

「断二穀断二塩、厭二世美味二」(上第五)、「断二穀断二塩、更不レ食二甘味二」(上第九、焼身)、「常以レ断二食為レ業二又断二塩」(上第廿)、「最初断二穀、菜蔬為レ食、次断二菜蔬、菓蔬為レ食、漸留二飲食一、服二粟一粒二」口離二飧食二」(中第四十四)、「不レ食二歷数日二」十廿日不レ食二断二食」(中第四十七、焼身)、「永断二穀断二、只飧二菜蔬二」(中第四十九)、「七日断二食」(中第五十三)、「数日不レ食二数日断二食」(中第六十六)、「断二食」(中第七十四)、「断二食断二塩」(下第八十九)、「断二食」(下第九十二)

『続本朝往生伝』

「長断<sup>三</sup>米穀<sup>二</sup>」(三〇)

『本朝神仙伝』承徳二年

「絶<sup>レ</sup>粒<sup>レ</sup>避<sup>レ</sup>穀<sup>二</sup>」(六)、「毎日服<sup>二</sup>粟一粒<sup>一</sup>」(一一)、「避<sup>レ</sup>穀<sup>レ</sup>絶<sup>レ</sup>粒<sup>二</sup>」(二四)、「全無<sup>二</sup>炊爨之器<sup>一</sup>」(二七)、「飲食長絶<sup>二</sup>」(二八)、「絶<sup>レ</sup>粒<sup>レ</sup>罷<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>」(一九)

『拾遺往生伝』

「数日断<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>」(上一六)、「断<sup>二</sup>穀塩味<sup>一</sup>」(上一七)、「断<sup>レ</sup>食七日<sup>二</sup>」(中二二)、「断<sup>レ</sup>穀<sup>三</sup>断<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>」(下一五)

『後拾遺往生伝』

「断<sup>レ</sup>食七日<sup>二</sup>」(上四、入水)、「七日断<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>」(下五、入水)

『三外往生記』

「永断<sup>二</sup>酒塩<sup>一</sup>」(三三)

『本朝新修往生伝』

「七日断<sup>レ</sup>食<sup>二</sup>」(一一、入水)

『高野山往生伝』

「断<sup>二</sup>塩穀味<sup>一</sup>」(四)、「永断<sup>二</sup>五穀<sup>一</sup>」口不<sup>レ</sup>嘗<sup>二</sup>塩酢<sup>一</sup>」(七)

これらを見ると、『日本往生極楽記』より後の往生伝などの断食に関するほとんどの表現が、『大日本国法華経験記』に含まれていることが分かる。共通している表現には二重線を引いておいた。よって、『大日本国法華経験記』の記述が、ほかの往生伝などでも採用された可能性がある。

また、鉄門海の『亀鏡志』に見られる断食に関する表現、「日を重ね断食し或ハ塩を断」、「断食し塩断して」、「断食塩断」、「断食を七日すれハ」も、『大日本国法華経験記』に見られる。『亀鏡志』にも、『大日本国法華経験記』が影響を与えた可能性も考えられる。ただし、先にも検討したように、鉄門海の場合、断食の目的は内外清浄にとどまるものではなく、大日如来と自己が「感応」すること

が説かれていた。この点は、平安時代の往生伝などに見られる自死の場合とは異なる。そして『亀鏡志』の断食には、他者救済という目的は見られない。

### 補論 盛岡藩領・岩手県域における鉄門海とその門下の布教活動

鉄門海、鉄門上人の石碑は庄内地方を中心に山形県外にまで存在する。<sup>30</sup> 彼が広範囲にわたって布教を行っていたことが分かる。石碑の八割は、「湯殿山 鉄門海」または、「恵眼院 鉄門上人」であるが、三山碑や南無阿弥陀仏などの碑文も見られる。

ここでは補論として、そのなかで鉄門海およびその門下の盛岡藩領と岩手県域における布教活動の展開について、新発見の資料を手がかりに、従来の説明の誤りを訂正しつつ述べたいと思う。当該地域において布教活動を主に担ったのは順番に、南海、門海・学竜海、鉄竜海である。

#### (一) 南海と門海

このたび鹿野と中村は、岩手県岩手郡岩手町の豊城稻荷神社(岩手町川口第一五地割一六二―二)の左脇の、額に「金毘羅様」とある鳥居から丘を登っていった上にある塚で、「鉄門上人」の文字が刻まれた石碑の調査を行った。<sup>31</sup> 塚の上には、左に文字のない石(横二五〇センチメートル、縦二二〇センチメートル、幅一五センチメートル)があり、その右側には折れた石碑があった。そこには文政元年(一八一八)十二月八日の日付が見える。調査の後、岩手県の石碑(県北と県南以外)を丹念に書き写した白澤正充『岩手の石碑』(二〇〇四年、岩手県立図書館所蔵)に当神社の石碑の図があ

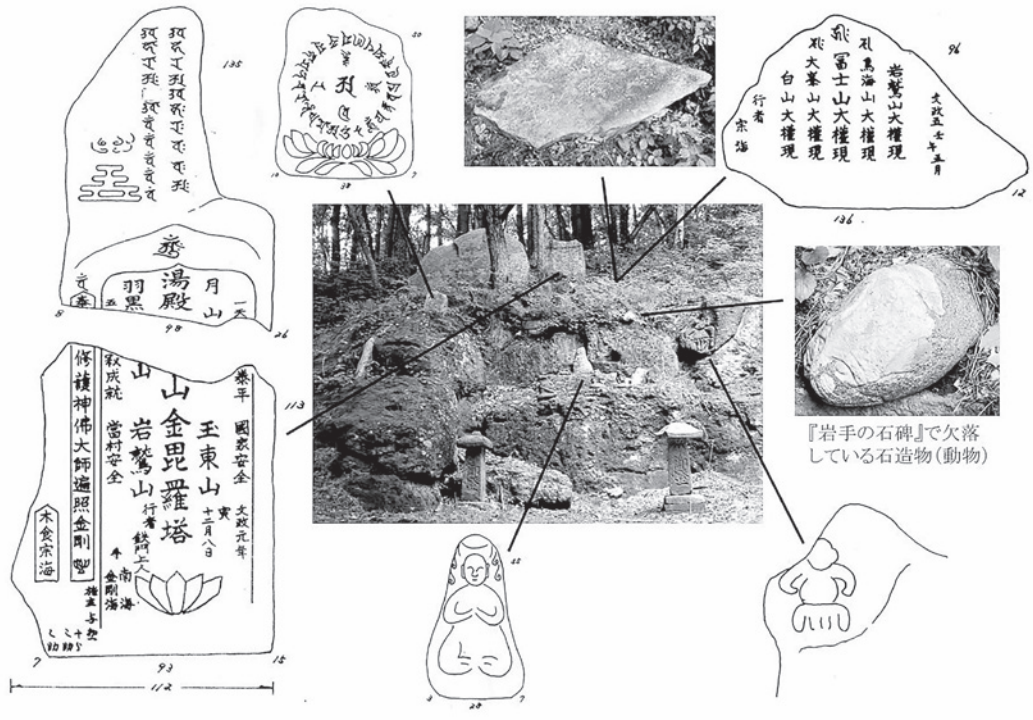


ることが分かった。ただし、塚の上の左側の石についての言及はなく、欠落している他の石造物（動物、石塔）もあり、また位置関係も不明である。白澤氏が書き写した石造物とその位置関係を示したのが下の図である。

ここで「玉東山」とは姫神山、「岩鷲山」とは岩手山、「當村」とは川口村のことである。

この岩手町の鉄門海碑は、『岩手町史』<sup>32)</sup>のなかに「鉄門上人」の名が見え、先述した『岩手の石碑』の図のなかにも見えるものの、これまでの研究では、岩手県内の鉄門海関係の石碑は現在のところ、二戸市に三基（九戸城跡松ノ丸跡／文化九・一八二二年一月、武内神社／文化九年一月八日、愛宕神社）、山田町に一基（関口神社／文政三・一八二〇年十一月）があることが指摘されているだけで、ほとんど知られていなかった。塚の上の右側の折れている石碑には、たしかに「鉄門上人」の文字が刻まれている。二つに折れているところを合わせてみると、この地域では出羽三山に行けない人々が、姫神山を月山に、金毘羅塔を湯殿山に、岩手山を羽黒山に見立てて信仰していたことが分かる。この「金毘羅塔」に当たるのが何を指すのか。当該石碑の立地を考えると、先述したとおり、川口の豊城稲荷神社の左手前に「金毘羅様」と書かれた鳥居があり、その鳥居から登っていった塚の上に当該石碑とその左側に石があり、そのほかの石造物もある。湯殿山とそれに見立てられた「金毘羅塔」というのは、塚の上の二つの石とかかわりがあるのではないかと考える。鉄門海本人が文政元年（一八一八）に現岩手町に来たかどうかは定かではないが、この塚はいわば「湯殿塚」とも言えるものであろう。

この補論でとりわけ注目したいのは「鉄門上人」の文字とともに、その脇にある「南海」の文字である。「南海」については「海向寺史料」<sup>33)</sup>酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇にもその名



『岩手の石碑』で欠落している石造物（動物）

が見える。文政十年（一八二七）十二月付けの文書には「南部出所也」として「南海行」とある（七〇四頁）。そのほか文政十年十二月付けで鉄門「上人」が「南海様」に宛てたもの（七〇五頁）、文政十一年一月付けの「同拾両御上に差上置候御証之扣」は、榊原伊三郎・寒河江壽右衛門・青柳周治が「鐵門上人」と「南海行人」に宛てたものである（七〇六頁）。弘化二年（一八四五）七月九日付けで注連寺の「鐵門海」が「清海御行」に宛てて「先達而海向寺南海病死いたし候」と伝えたものと、それに対して清海が「注連寺」と「鐵門上人様」に宛てて「酒田海向寺南海御行御病氣之処御養生不レ被レ為レ叶、終ひ御病死被レ成何共御悔可ニ申上ニ様無ニ御坐ニ御同意殘多奉レ存候」と答えたものもある（七〇八頁）。「妙高山海向寺」のなかには「權大僧都南海法印 文政十二年己丑六月二十四日」と見える（七一三頁）。さらに「海向寺史料」には南海について以下の通り詳しく紹介した文書がある（七〇六頁）。

南海行者南部国沼郡内と云所より参居候御行也。文化九年八月  
中頃御上人様加茂坂切平らけ道普請被レ遊し頃、御上人様え隨  
身し御氣に叶ひ、其後文政六年末十月海向寺看主ニ被レ仰渡一  
而首尾能相勤候。其後勝手廻御寝所住居直し之普請悉く結構ニ  
出来上り、文政十二年六月廿四日ニ病死いたし、則遺骸ハ真  
言宗竜巖寺ニ火葬にして海向寺中ニ葬る。

南海は盛岡藩領の沼郡内（沼宮内）出身で鉄門海の門人となり、海向寺住職にまでなっており、鉄門海の信頼が厚かったことが分かる。

前に掲げた『酒田市史』に掲載されている文政十二年（一八二九）十月二十五日付けの鉄門海の遺言書には、鉄門海が後事を託した門下のなかに「南部森岡／門海」と見え、さらに「南部門海弟子／学竜海」とも見える（七〇〇頁）。山澤学氏はこの資料に注目して鉄門海の盛岡藩領での布教の後継者として門海を取り上げている

が、その前に南海の活動があったことを見落としている。南海は鉄門海が亡くなる少し前の、文政十二年六月に亡くなったため、遺言では後事を門海、そしてその門下の学竜海に託したのである。

## （二）鉄竜海

鉄竜海に関する記述の基になっているのは、渡部留治編著『朝日村誌（一）湯殿山』（一九六四年）であろう。まずは同書での鉄門海についての記述を見ておく。鉄門海は、明和五年（一七六八）秋に生まれ、酒田・海向寺の再建を始め、鶴岡・南岳寺、狩川・西光寺、盛岡・金剛珠院や連正寺なども、すべて鉄門海が建立したものであるとされている。そして、空海が六十二歳で入定した故事にならない、「私は仏の前で大往生をとげます」と、穴にこもらず、注連寺の大本堂で鐘をたたきながら大往生を遂げたという。

そして鉄竜海に関しては、伝説として以下のように述べている。すなわち、鉄竜海は、現秋田県仙北郡に生まれ、南岳寺の天竜海のもとに弟子入りした。そののち南岳寺を建立した鉄門海にゆかりのある盛岡・連正寺の住職となった。ところが、その連正寺が嘉永年間に焼失したので再び南岳寺に戻ったという。鉄竜海が仙人沢で修行したのは文久二年（一八六二）七月からと伝えられ、一千日間こもって、火よけ・病気よけ・安産の法を祈願した。そして、明治元年（一八六八）、南岳寺境内の堂下に石室を作って生きながら入定した。

この伝説中で鉄竜海は火よけの法を祈願したとあるが、この点には信頼できると考える。と言うのは、実際に南岳寺（鶴岡市砂田町）には鉄竜海に関する五点の掛け軸があるが、このうち四点はほぼ同様のもので、火災除けのための「火伏一筋籠」である。そのうちの一枚にはつぎの文字が記されている。

湯殿山 一千日山籠行者鉄竜海上人 (右手形)

(龍) (左手形)

日四海水献

「龍 日四海水献」の典故は、天倫楓隠編『諸回向清規』(永禄九・一五六六年、明暦三・一六五七年刊)の「家有壬癸神日献四海水。」であり、正確には、「龍 日献四海水」(龍に日々四海の水を献ず)である。その意味は、竜は東西南北の海より水を集めて、大地に与える、つまり、海の水蒸気から雲を起し、雨を降らせ大地を潤わせる。そして、火に対する水ということから、龍は火を防ぐ防火神の象徴でもある。

ところで『朝日村誌(一)湯殿山』では、さきの伝説とは異なる平山啓一郎(当時八十九歳)の証言も記載している。それによると、鉄竜海は非常に意志の強い人であったが、仙人沢にこもり、木食行を終えてからはすっかり健康を害し、入定することは寺の住職や医者から堅く禁じられていたという。これによるかぎり、鉄竜海は入定自死の意志を抱いていたようである。

この平山の証言を受けて渡部留治氏は、鉄竜海は本当は病死したらしく、生前の願いをかなえるため、入定のために用意してあった石室に葬ったのではないかと推測している。さらに平山啓一郎の「おぼろげな記憶」を紹介し、明治十二年頃、三浦と丸山なる人物が、鉄竜海の石室を発掘し、そこから鉄竜海の遺体を出したという。平山がその二人に聞いたところ、石室のフタを開けると二人に飛びかかればかりの感じであり、遺体はまだ生かわきだったので、本山の注連寺に運びあげて完成させ、内臓は切り取って、その中に木炭を入れたと言ったという。この証言を受けて渡部氏は、南岳寺の即身仏堂わきに明治十四年と彫られた鉄竜海の小さな碑があったことを述べている。さらに渡部氏は、昭和三十五年(一九六〇)の出羽三山ミイラ学術調査団の一員であった安藤更生氏の見解

を紹介している。それによると、この石碑が鉄竜海の墓を意味するとすれば、内蔵を埋めた所には違いない。発掘は明治十二年でなく、石碑の明治十四年が正しいのではないか。死後十余年間地下に埋まっていたのに、内蔵がそのままだったとしたらおかしい。入定したのは明治元年よりも新しいと推定される。しかし、南岳寺が焼け、過去帳など一切の証拠のなくなった今では、鉄竜海の入定した時期を証明するものはまったくないことである。

つぎに南岳寺のパンフレットを見る。その内容をまとめると以下のようになる。すなわち、鉄竜海は文化四年(一八〇七)、秋田県仙北郡仙北町堀見内進藤家に生まれ、南岳寺住職の天竜海のもとで得度し、南岳寺と注連寺で修行した。そして盛岡の連正寺の住職となったが、嘉永年間に南岳寺が焼失したために戻って南岳寺を再建し、その住職となった。さらに後の師である鉄門海発願の加茂坂道路改修工事の責任者となり、文久元年(一八六一)五十五歳で、空海の「入定留身して後の世の人々を濟度せん」との誓願のもと、湯殿山仙人沢に山籠し、一千日木食行を、さらに災厄消除などの修行をした。そして即身仏となり、空海と同じ六十二歳で明治元年(一八六八)八月八日に入寂したということである。これは、焼失したのが連正寺と南岳寺で異なっているが、基本的には『朝日村誌(一)湯殿山』記載の伝説に由来するものである。

これに対し近年、『朝日村誌(一)湯殿山』記載の平山啓一郎証言がほぼ当たっていることを裏づける指摘がなされている。内藤正敏氏は、南岳寺にある鉄竜海の墓碑には明治十四年十二月二十八日の日付がみられることを述べている。また、畠山弘氏は、近年鶴岡市役所から戸籍が見つかり、明治十四年の死亡が明らかとなったこと、南岳寺境内には明治十四年十月二十八日と刻まれた鉄竜海の小さな墓が現存することを述べている。ただし、中村が鶴岡市役所に確認したところ、鉄竜海の戸籍については不明であるという。



以上を受けて、鉄竜海と盛岡との関係について『いわてのお寺さん―盛岡とその周辺―』を取り上げる。じつは同名の書は二種類ある。一つは、テレビ岩手編・岩手県仏教会連盟監修の一九七五年刊行のもの（以下、前書と呼ぶ）、もう一つは、これをもとにした外内英子編の二〇〇三年刊行のもの（以下、後書と呼ぶ）である。前書は各寺院について、それぞれの当時の住職が執筆しているのに対し、後書は編者が、当時の住職に話を聞いて執筆し、その原稿を住職に見てもらったというものである。ここでは、盛岡市の連正寺を取り上げる。

まず前書から見る。これは当時の住職である第六世・帯刀清運氏が自ら執筆したものである。それによると、湯殿山連正寺の開山は門竜海であり、明治十二年（一八七九）に堂宇を建立し、本堂は五間四面、境内面積は一二〇坪あったという。そして開基は明治十三年（一八八〇）四月であったという。ところが、明治十七年（一八八四）の大火で一切を焼失したため詳細は不明であるという。ちなみに同書中、同じ山号を持つ湯殿山金剛珠院についても、当時の住職である第四世・佐藤永隆氏が執筆している。それによると、明治初年、佐藤長全・清岳が三山先達（参拝者案内役）として旧南部領内から盛岡に来て、盛岡などで布教活動を行い、第一世となった長全が明治十三年（一八八〇）四月に大手先東側に本堂と庫裡を建てて金剛珠院を創立し、第二世清岳のときに、大手先西側の現在の境内地および本堂などの建物がある場所に移転したということである。

つぎに後書を見る。それによると、連正寺の開山は鉄門海で、文政三年（一八二〇）に来盛して布教したとされ、それを引き継いで、明治十二年の仏堂建立になったとみられるという。ところが、明治十七年の大火で一切を焼失したため詳細は不明であるという。なお、湯殿山金剛珠院のホームページ<sup>40</sup>の連正寺のページには、明治

十二年に本堂が再建立されたが、鉄門海が開山したと伝えられており、嘉永元年に大火で一切を焼失したため、孫弟子の鉄竜海が信者の協力のもと再建したと記されている。ちなみに『いわてのお寺さん―盛岡とその周辺―』で金剛珠院については、文政十二年（一八二九）、信者が見守るなか「我に祈願するものに対しては諸願を満足せしめん」の言葉を残し即身仏となった鉄門海が、即身仏になる十年ほど前、来盛して布教し、それが金剛珠院を開く礎となったという。そして明治初期に、佐藤長全・清岳が各地で布教活動を行い、明治十三年、仮本堂から現在地に移転して仏堂を建て、現寺号で創建。平成四年に仏堂を修復し、庫裏を新築したのだという。

両書の記述は異なっているが、盛岡市の連正寺の創設者は鉄竜海ではないか。金剛珠院の方は佐藤長全・清岳であろう。前書は鉄竜海を門竜海と誤っているが、大筋に間違いはないと考える。ところが後書は連正寺と金剛珠院を、金剛珠院のホームページは連正寺を鉄門海に結びつけようとしている。これは「英雄」鉄門海を両寺院に関係させようとしたためと考えられる。

山澤学氏は両書の違いについて指摘し、前書を正しいものとして、連正寺を建立したのは鉄門海ではなく、注連寺から派遣された門竜海であり、その創立時期は、江戸時代盛岡の城下町絵図・史料に両寺が見えないことから、「明治十二年」には妥当性があることを述べている。大枠でその通りであると考え、後書の誤りを踏襲し、建立者を門竜海としていくところに問題が残る。

このたび中村は岩手県盛岡地区合同庁舎岩手県文書保存庫において、以下の公文書を発見した。

#### 説教所設立願

山形県羽前国田川郡大網村百三十三番地

真言宗注連寺住職

補中講義密涌則榮



代理  
教導職試補 進藤鉄竜海

今般当御県下於テ湯殿山大日如来信徒ノ者式千余名有之、右ノ者共ヨリ説教依頼ニ付、南岩手郡東中塾村廿三地割三百七十九番地買請候約定仕候、同地え説教出張処立申度ク奉存候、尤右信徒ノ者共ニ於テ金三百円相募、向來永統目途相立候間、設立御許容被成下度、仍之信徒重立者連印以テ此段奉願候、以上

右

明治十二年五月廿七日

進藤鉄竜海(印)

信徒組頭

南岩手郡	東中野村二百五十六番地	吉田市十郎(印)
同郡	仁王村油町九十四番地	柵山市五郎(印)
同郡	東中野村十六番地	櫻田孫兵衛(印)
同郡	仁王村本町八十番地	石山康太郎(印)
同郡	同村八日町三十八番地	金田一命助(印)
同郡	同村四ツ屋町四十五番地	山崎 周治(印)
同郡	仙北町村百五十二番地	箭川清太郎(印)

岩手県令島惟精殿<sup>(4)</sup>

明治十二年(一八七九)五月二十七日、注連寺の教導職試補・進藤鉄竜海ら八名が岩手県令に宛てて、東中野に説教所を設立することを願ったものである。進藤家は鉄竜海の実家である。明治十二年において鉄竜海は生きており、盛岡で布教活動を行っていたことは明白である。盛岡の連正寺の寺伝と考え合わせると、この設立願が同寺設立のもとになったのではないか。連正寺の創立者は、注連寺の「即身仏」鉄門海ではなく、南岳寺の「即身仏」鉄竜海であったと考える。

南岳寺は昭和三十一年(一九五六)に焼失し、現在の鶴岡市砂田

町に移ったが、中村はその跡地の同市三光町(旧白銀町)の墓地で鉄竜海の墓碑の調査を行った。その墓碑には表面に、

明治十四年

ア(胎藏界大日如来) 鐵龍海上人位

十月廿八日

とだけあり、ほかに文字はない。その周りには南岳寺の住職などの墓碑がある。以上を勘案すると、明治十四年(一八八二)十月二十八日が鉄竜海のいわゆる命日ということになる。

おわりに

本稿では、江戸時代の即身仏の思想について、比較的多くの資料が残っている鉄門海 of 思想を取り上げ、これまで本格的に取り扱われてこなかった、彼にかかわる『龜鏡志』を中心に据えて、引用典籍の分析を行い、平安時代の往生伝なども比較しつつ検討した。

鉄門海 of 生前の活動を見るかぎり、窮民や女性などの庶民救済の目的を見て取ることができる。しかし生前の活動と即身仏となる動機とは分けて考える必要がある。即身仏となる動機に、戸川氏や松本氏、近年の内藤氏が言うような衆生救済・庶民救済・民衆救済・他者救済の思想があったと言いつてもいい。平安時代の焼身往生・入水往生の動機については、少なくとも我が身を諸仏などに供養すること(焼身往生)と、世を厭うこと(焼身往生・入水往生)という二つを見ることができたが、いずれも鉄門海 of 思想には見られない。即身仏と深くかわる断食に注目すると、それが多く見られる平安時代の往生伝などでは、身体 of 浄化という目的を見て取ることができるのに対し、『龜鏡志』の場合は、身体 of 浄化だけにとどまらず、自己(身体)と大日如来との「感応」を求めており、他者救済という目的は見られないことが明らかになった。な

お、補論においては鉄門海とその門下の盛岡藩領と岩手県域における活動について、新発見の資料をもとに、その展開の主要なところを明らかにすることができた。

## 注

- (1) 中村安宏は岩手大学人文社会科学部教授。鹿野朱里は岩手大学人文社会科学部二〇一九年度卒業、八幡平市学習支援員（西根中学校勤務）。
- (2) 戸川安章「出羽三山のミイラ伝」（中央書院、一九七四年）一頁。
- (3) 松本昭「日本のミイラ伝」（六興出版、一九八五年）一七二頁。
- (4) 以上、内藤正敏「日本のミイラ信仰」（法蔵館、一九九九年）一七二～一七六頁。
- (5) 同右、二二〇頁。
- (6) 桂鳳「現証往生伝」（元文四年）、笠原一男編『近世往生伝集成 一』（山川出版社、一九七八年）一三二頁。
- (7) 行阿「尾陽往生伝」（慶応四年）、同右、二九二頁。
- (8) 内藤氏前掲書、二六八～二六九頁。
- (9) 加茂坂普請については、山澤学「湯殿山木食行者鉄門海の実像」（二〇一六年三月二十七日の講演記録、鶴岡市立図書館鶴岡市郷土資料館編『通史の中の庄内―鶴岡市立図書館百周年記念歴史講演会講演録―』二〇一七年）に詳しい。
- (10) 「町年寄日記抜書」「松前町史 史料編 第二巻 四四九～四五二頁参照。
- (11) 「神と呼ばれた木食行者 鉄門海」（湯殿山注連寺発行、二〇一九年）四頁。
- (12) 同右、一一頁。
- (13) 同右、一二頁。
- (14) 同右、三二頁。
- (15) 工藤定雄編『酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇』（一九七七年）七〇四頁。
- (16) 同右、七〇六頁。
- (17) 同右、七〇九頁。
- (18) 同右、七〇七頁。
- (19) 「蘇婆呼経」とは、輸波迦羅（六三七～七三五）が唐の開元十四年（七二六）に訳した「蘇婆呼童子請問経」（大正新脩大藏経）第十八卷、密教

部、八九五）のことであり、引用箇所は、巻中のつぎの二箇所をつなぎ合わせたものである。「念誦人起首求悉地者、応具八戒、或三日亦須斷食、然後作成就法。」「我所出語者、不為心淨故、教令斷食。但諸衆生、以皮纏縛血肉隨腦肝膽腸胃心腎脾肺、脂膩痰膜尿管、種種穢物常流不停。如是之身地水火風假合成立。如四毒蛇置之一篋。欲令彼等、屎尿涕唾臭穢不令出故、為遣斷食。非為妨道而遣斷已。」「ここから、「亀鏡志」の「八戒」は「八戒」の誤りであることが分かる。

(20) 「穢塵利童子経」からの引用は、「観自在菩薩化身糞裏哩曳童女銷伏毒害陀羅尼経」（大正新脩大藏経）第二十一卷、密教部、一六六四）所収の「仏説穢裏哩童女経」のつぎの箇所である。「修行者欲成就此法、先斷五辛亦不食塩不食油、斷語於一淨処、三時澡浴三時換衣、結印誦隨心真言滿一万遍、則行法成就。復作一切事必獲成就。」「観自在菩薩化身糞裏哩曳童女銷伏毒害陀羅尼経」は、西域に生まれて長安に入り、密教経典を多数翻訳し、空海も私淑していた不空（七〇五～七七四）が訳したものである。

(21) 「瞿曇経」からの引用は、頼瑠撰『薄草子口決』（大正新脩大藏経）第七十九卷、統諸宗部、二五三五）第十三のつぎの箇所を孫引きしたものである。「瞿曇経中云、換衣是外潔、斷食是内潔。若内外淨潔、所得果報微妙第一」。なお「瞿曇経」は、不空が七四六～七四七の間に訳したものである。また頼瑠（二二六～一三〇四）は紀伊那賀郡の豪族で、奈良で頭教を学んだのち高野山、仁和寺などで真言を学び、新義真言宗を別立している。

(22) 「西域伝」からの引用は、唐の道世（？～六八三）編「法苑珠林」（大正新脩大藏経）第五十三卷、事彙部・外教部・目錄部、二二二二）第六十のつぎの箇所を孫引きしたものである。「案西域伝、南海之浜有山寺、觀世音菩薩常止其中。随有念者随应如響無不感赴。若至山寺斷食七日、即見聖者親為說法。良以斷食心猛故使感見通明。」「法苑珠林」は、六六八年に成立した中国最大規模の仏教百科全書で、日本でも奈良時代以来重宝され、典籍の孫引きにも使用されている。康暦三年（一三八一）に五山で版行され、江戸時代にも版行されている。

(23) 「朝日村誌（一）湯殿山」（一九六四年）では「感応しかるべからず。」と翻刻してあり、大きな間違いを犯している。また、松本昭氏も「湯殿山系一世人とその木食行について」（日本ミイラ研究グループ編『日本ミイラの研究』平凡社、一九六九年、二七〇頁）のなかで、この間違いを踏襲しており、内藤氏前掲書（二二六頁）も同様である。

- (24) 『大日本国法華経験記』 卷上、「第九 奈智山の応照法師」(日本思想大系七『往生伝 法華験記』 六四～六五頁、原漢文)。
- (25) 『大日本国法華経験記』 卷上、「第十五 薩摩国の持経の沙門某」(同右、七二頁、原漢文)。
- (26) 『拾遺往生伝』 卷下、「十七 持経者長明」(同右、三七二頁、原漢文)。
- (27) 『後拾遺往生伝』 卷下、「五 上人行範」 大治年間(同右、六六四頁、原漢文)。
- (28) 『三外往生記』、「二〇 土佐国金剛定寺上人」(同右、六七五頁、原漢文)。
- (29) 『三外往生記』、「四五 越前国入道念覚」(同右、六八〇頁、原漢文)。
- (30) 『神と呼ばれた木食行者 鐵門海』 一九頁。
- (31) 詳しくは、「若手県若手郡若手町の豊城稲荷神社の鉄門海碑に関する調査報告書 (<https://jinshaiwate-u.ac.jp/~yasuhro/tetsumonkaipdf/>)」(二〇二一年) 参照。
- (32) 『岩手町史』(一九七六年)「第三編 教育と文化」第三章 民間信仰「第一節 岩手町内の石塔」の「岩手町内石塔一覽表」(七八六頁)。
- (33) 山澤学「湯殿山木食行者鐵門海の活動形態―盛岡藩領を事例として―」(『歴史人類』 第四三号、二〇一五年)、『神と呼ばれた木食行者 鐵門海』など参照。
- (34) 山澤氏前掲論文(二〇一五年) 参照。
- (35) 『大正新脩大藏經』 卷八十一、統諸宗部、二五七八。
- (36) 「そのミイラは六体のうち一番新らしく、(中略) 入定した当時の事を親に聞いたり、子供心に覚えていて、いわば「生き証人」がいるのではないか、との観点に立って聞き込みの結果、鶴岡市十日町筆墨商平山啓一郎(八九)も、その貴重な生き証人の一人だった。平山老は六十年間も南岳寺の信徒総代を勤めたが、先代利正(二十四年前死亡)が、鉄竜海上人を非常に崇拜していた。」(『朝日村誌』(一)湯殿山 一四八頁)。
- (37) 安藤更生『日本のミイラ』(毎日新聞社、一九六一年) 一二六～一二七頁参照。
- (38) 内藤氏前掲書、一七八～一八〇頁、一八五～一八六頁。
- (39) 『湯殿山と即身仏』(爐の会、二〇〇一年) 一一一～一二三頁。
- (40) <http://yudonosaninfo/>(最終閲覧日 二〇二三年三月三十一日)。
- (41) 山澤氏前掲論文(二〇一五年) 二六～二八頁参照。
- (42) 『明治十二年 社寺回議綴 十』(第一課(庶務課) 六、(文書日付) 明治十二年(一八七九) 六月二日)。

## 付記

本稿は鹿野の卒業論文をもとに、全体の骨格にかかわる「はじめに」と「おわりに」、及び一を鹿野、二の(一)を中村の指導のもとで鹿野、(二)を鹿野、補論のうちの鉄門海と南海にかかわる部分を鹿野と中村、門海と鉄竜海にかかわる部分を中村が担当した。